

葛飾区在住の写真家、奥宮誠次さん(六五)が今月、写真詩集「原発ガーデン」映画監督デレク・ジャーマンの最晩年」(百年書房)を著した。被写体となったジャーマンさん(一九四二〜一九四年)は、原発のすぐそばで「最後の作品」となる独創的なガーデンニングを始めた英国人男性。「カラヴァッジオ」「ザ・ガーデン」などの映画を撮り、性的少数者でエイズウイルス(HIV)に感染していた。その心情に、死後二十年以上たった今、奥宮さんは迫っている。

(井上幸一)

### 葛飾の奥宮さん 心情に迫る写真詩集

# 「捨てられた土地」に遺した 原発ガーデン



デレク・ジャーマンさん。写真詩集「原発ガーデン」にはこの白黒写真を掲載している(奥宮さん撮影、百年書房提供)



草花だけでなく、漂流してきた木や腐った鉄などを使ったデレク・ジャーマンさんのガーデンニング(奥宮さん撮影、百年書房提供)

ジャーマンさんは、舞台デザイナー、詩人、園芸家としても知られ、生前、ゲイであると公表している。五十代の若さで、エイズ(後天性免疫不全症候群)で死去した。

奥宮さんは、八六年からロンドンを拠点に活動。原発が建ち、漁師たちが去ったロンドン南東のケント州のダンジネスという海沿いの場所で、八九年から死の一年半ぐらい前まで、ジャーマンさんや庭、原発にカメラを向けた。

写真詩集「原発ガーデン」を手にする著者の奥宮誠次さん(台東区で)



地で、漂流した木や、さびた鉄などを使ってアートな庭づくりをしていたジャーマンさん。「ゲイというマインリティーの自分と、原発の建設で『捨てられた土地』とを重ね合わせていたのでは」と奥宮さんは推測する。撮りだめた写真、ネガはジャーマンさんの回顧展を開催した英国の芸術劇場に貸し出した際、紛失の憂き目に遭った。

二〇一二年に帰国。手元には二十ほどのネガだけが残っていた。昨年暮れ、台東区寿二の書店「リーディン・ライティン」で初めて展示すると、百年書房編集者の藤田昌平さん(四七)の目に留まった。藤田さんは「LGBT、原発と、現代を先取りしたようなテーマと向き合った『早く生まれすぎた芸術家』の姿から、何かを感じてもらえたら」と出版を勧めた。

価格は五百円(税別)。収益の一部(一冊につき五十円)は、「エイズ予防財団」に寄付される。リーディン・ライティンでは、収録されている写真を十一月二日まで展示している(月曜定休)。問い合わせは、百年書房(電03(6666)9594)へ。

性的少数者の英国映画監督